自　活　は　楽　し

津　和　秀　夫

みそ汁の味

わが家のみそ汁は「父親の味」という．「母親の味」とは言わないわけだ．その理由はもちろん，みそ汁作りが父親である私の毎日の日課となっているからだ．そのいきさつはこうだ．

私は若い頃から「馬鹿の大食い」で，「阿呆の三バイ汁」だった．朝のみそ汁が大好きで，2ハイ3バイとお代りをしたものだ．それが戦後日本人の食習慣が変って，女房子供は朝食はパンがよいという．そして私にもパンにせよと半強制的にのたまった．そこで我輩，ここで負けてなるものかと，「馬鹿者，みそ汁を食わねば日本精神がすたれる」の一喝を喰らわせた．

こうまで強烈にみそ汁を守ったのには，一つの理論的裏付けがある．昭和の始め，小学校の先生が教えて下さったことが，私の頭にこびり付いているからだ．それは，日露戦争で，小さい日本がなぜ大きなロシヤに勝ったかという理由についてのことだ．ドイツは一生懸命に研究して，結論として「日本には完全食品としての味噌がある」ということになった．わずかの味噌と米さえあれば，困苦欠乏に堪えて，長期の作戦ができるというドイツの科学的研究結果だ．

以来20年，わが家の朝食は，一人の日本男子のための日本食と，その他のためのパン食との2本立てを余儀なくされた．この不合理に堪え兼ねてか何かは知らないが，5年ぐらい前に家内が「パパも，いい加減にボツボツ，パンにしては」とおっしゃる．そこで，本来素直な私は「ここらでパンに切り換えようか．ホテルの朝食もうまいからな」と思ったが，また別の私が言う．「日本精神がすたれるぞ」と．そこで妥協案として，「よろしい．俺の朝食ぐらいは俺がつくる」となって，わが家のみそ汁は「父親の味」となった．

ものごとは何でもそうだが，実際にやってみたら，そんなに大して難かしくはない．だしをとって，適当なあり合わせのものを放り込んで，味噌をサッととけば，香りの高いみそ汁ができあがる．私にとっては朝の軽いウォーミングアップのようなものだ．こうなると研究心も湧いてきて，料理屋の親しい板前氏にヒントを聞いたりなどするから，ますます手があがる．娘は「父親の味」を喜んで賞味するということになる．

このあいだは，19才の娘の話を聞いて驚ろいた．娘の親友のお嬢さんが，私にプレゼントをしたいという話だ．「サスガ，ワガハイも相当にもてるな」と思って喜んだが，あとがいけない．「エプロンどう？バッチリよ」ということだ．私はそのエプロンを心待ちにしている．とにかく，それほどに，わが家の「父親の味」は有名だ．そして，文句なしにうまい．

一つのバケツ

40年近い昔，熊本の旧制高等学校に入寮の日，私は寮生必需品の一つとして，中形のバケツを渡された．何故にこんなものが必需品かと驚ろいたが，寮生活数日で，学校当局の深い配慮に敬意を表することとなった．それは一つのバケツが寮生活全般に実に重大な役割を果していることを体験したからだ．

朝起きると，バケツに歯ブラシ・歯みがき粉と石けんを放り込んで洗面所に走る．バケツが洗面器だ．手ぬぐいは腰に常時ブラ下げているきたならしい奴で間に合わせる．

夕方の入浴では，このバケツが手桶の役目を果たす．洗濯は滅多にしないが，余りにも下着

が汚れたときなどには，このバケツが洗濯だらいの役割をする．そしてさらに稀なことだが，バケツ本来の使命を遂行するために，雑キンバケツとなって，タタミや机を拭くのに使われる．

それよりも，もっと私たちにとってバケツの果たす重要な役割は，夜更けのストームの打楽器となって惰眠の夢をむさぼる軟弱者を起こすことだ．また逆の立場にあるときは，このバケツに水を汲んで，階段の上から深夜の浪藉者に冷水三斗を浴びせかける．浪藉者の側にとっては，激しい運動で大汗をかいているときだから，バケツの水に，むしろ感謝し，さらに勇猛心を奮るい立てて，次の寮へとストームの波は果てしなく続く．

こうしてストームをやったとき，やられたときは豚のように眠りこけて，眼覚まし時計の鳴ったのも知らない．そこで先輩の知恵者が教えてくれる．「目覚まし時計は，バケツに入るるとデスタイ」なるほど，目覚しのベルにバケツ全体が共鳴して，ただもうウワーン鳴りひびき，如何に無神経者でも飛び起きざるを得ない．

とにかく一つのバケツの持つ意義は大変なものだった．だから寮生はバケツに墨黒々と名前を大書して，自己の存在の象徴としていた．そして私たちは簡易生活の面白さを知り，融通無碍な考え方を身に着けて行くのだった．

念願のアトリエ

私は生涯の希望として，誰にもわずらわされない自分だけの部屋が欲しいと思っていた．好きなように散らかし，汚ないと思えば自分で片付けて掃除するという粗末な一室，ちょうど寮の一室のようなものが欲しかった．それが昨年やっと念願叶ってアトリエという形で完成した．

十帖ほどの一部畳敷きの簡単な部屋だ．私はここで南画を画き，大工仕事をし，彫刻をし，さらには宝石磨きもしようと思っている．もちろん，本を読んだり，勉強したり，原稿を書いたり，酒をたしなんだり，親しい友と長夜の宴を張ったり，ときには寝たりも，全部ここでする．だからアトリエは，私にとっては居間兼実験室兼書斎兼応接室兼台所兼食堂兼寝室ということだ．

ここは私の夢を伸ばすところだ．だから天井も壁も要らぬ．倉庫みたいなもので結構．あとは自分でコツコツと何とか格好を付ける．ということだったが，工務店の側としては，それでは形が整わないらしくて，結局天井と壁は張ってもらった．そのかわり，あとの室内調度は全部自分で造ることとした．

カーテンは日焼けしたオンボロを物置から持ち出して，長過ぎるところは鋏で切ったままだから，糸くずが垂れ下っている．そのうちに自分でミシンを掛けるつもりだ．本箱と机は家の残材で造った．ミカン箱や段ボール箱も整理棚の代用となる．そのうちに暇を見て，あり合わせの木片で加工すれば何とか体裁が整のう．椅子も食器も包丁も匙・フォークの類から灰皿まで，全部家内が廃棄処分にしたものの復活だ．それでも結構役に立つし，この部屋にはマッチする．

私はここを「〇〇庵」と名付けて，ついの住み家としたいと思っている．掲げる看板の材料は山から拾って来たのがある．目下その名前を考えているところだ．定年になったら，ここに終日暮らして，簡易生活を営なむ．炊事から洗濯，針仕事まで全部自分でまかなう．そして廃物利用でいろいろのものを造って，自分で使ったり，人にあげたりしたい．こりや楽しいぞ．早く定年が来ないかなあ，という心境だ．

自活は楽し

私は生産工学の一分野，精密加工の領域を歩いてきた．精密加工というものは，人手をかけて丁寧に慎重に生産するという技術で，自動加工とか多量生産とは逆の立場にあるものだ．ところが戦後の30年は，専ら量産技術が発展して，世の中は規格品の量産品で溢れるようになった．今では衣食住の総べてが，工場生産で間に合う状況だ．

考えてみれば，安い値段で立派な品物が手に

入るので，誰でも喜ぶし，近代文明の成果と，それを産み出した科学に満腔の感謝を捧げたくなる．ところが現実に，身の回りが総べて工場生産の規格品によって取り囲まれたとき，人はオヤッと驚ろき，戸惑い，失望を感じる．

その失望とは「物」に対しては愛情の湧かないこと，「人」に対しては「つくる能力」や「つくる喜び」を失なわせることだ．これは人間社会にとって，実に重大なことだ．社会的には愛情の薄れた乾燥社会をもたらせるし，人間のもつ最も素朴で本質的な生産本能を失わせる．いま日本人はこのことに気付き始めた．手造りブームや自作の流行はその現われだ．

とにかく人間は，身の回りのこと総べてを自分でまかなうことができるような能力を持ってこの世に生まれ出ている．小屋を建てて雨露をしのぎ，狩獵農耕をして食糧を保ち，火をおこしてこれを調理し，糸をつむぎ糸を織って衣をつくり，生活万般を自分の力でできるはづだ．ところが文化文明が進み，分業が発達すると，この能力が専門化して，近代人はついに生活の全部を他人の力に頼るようになって，自己の持つ生産能力を失ってしまった．そして「生活能力」とは，お金儲けの上手な人や，権力の座に着くことにさとい人達に奉る言葉となり果てた．情ないことだ．

私は私なりに，ささやかな抵抗を試み，できる範囲で自活をしようと思っている．そして現実にやって見ると，この上なく楽しい．「父親の味」のみそ汁は，家内は「ひどいもの」と評価するが，つくった私は一流料亭よりもおいしいと，「三バイ汁」を楽しむ．

最近，私は自活の楽しみを決定的なものにする一つの歴史的実証を知った．それは南米のある国のことだ．ここは世界有数の長寿国として知られている．60才を過ぎた老人は別居して，それぞれに自活するというのだ．その効果は顕著で，普通で100才の長寿，そして150才位の人も珍らしくないという．老人が自活することによって，人間本来の素朴な能力に目覚め，生きることの希望と楽しみが湧き上り，その結果は，人間が本来持っているはづの寿命として，150才ぐらいまでは楽に生き得るということだ．私の場合は，こうして自活を実行することによって，150才は無理としても，100才は確実だ．とにかく，老人福祉の問題が今後の社会に大問題を投げようとするとき，老人は福祉に頼らずに敢然と自活するという心意気を持ちたいものだ．

21世紀のメガネ

あと25年で2000年，21世紀がやってくる．これは1000年に一度の大きな区切りだ．しかも，人類の長い歴史から見るとき，物質文明や科学文明の独走によってもたらされた文明社会のひずみが矯正される時である．そして西洋の物質文明と東洋の精神文明が，見事な調和を見せるときだ．白人の世界支配は完全に終局を迎え，全人類が平和を楽しむ理想郷が訪づれる．

その理想の21世紀に導びくためには，日本人は今後偉大な仕事をしなくてはならない．それは，長く美しい日本歴史を通じて，日本人の生きて来た自然順応の立派な生活とその考え方を世界の人々に教えることと，物質文明と精神文明の調和と，東洋と西洋の融和を実現させるということだ．

これから4分の1世紀，日本人は忙がしくなるぞ．これは面白い．あれもやらねばならない．これも考えねばならない．そうだ，自然の中で自活することも，西洋人に教えてやらねばならない．

私は机に向って，こんなことを考えていると楽しくてたまらない．この間も愛用の老眼鏡をかけ，机に向って本を拡げたまま，ぼんやり考えていた．そのユートピアへの思考は，たちまち家内の一声によって破られた．

「パパさん，何をボンヤリしているの」

そこで，ここぞとばかり，私も言ってやった．

「21世紀のことを考えている．お前にはわからんよ」

すかさず家内が切り返した．

「それが21世紀のメガネなの」

これは1本とられた．

私の「21世紀のメガネ」は，図のように，片方のつるがひもでできている．実はつるがこわれたので，止むを得ず，ひもで代用したところ，

以外と便利なので，以来家の中で愛用しているものだ．

先ず，メガネを外すときは，ひもが耳に引つかかっているので，一方のつるを外して耳からぶら下げるだけでよい．メガネをしまう必要もなければ，もっとよいことには，その所在を探し回る必要もない．

第2には，うつ向いて彫刻や大工仕事をするとき，汗でメガネがずり落ちるが，これはひもで耳に止まっているので，絶対に間違わない．第3には横向きに寝て本を読むとき，ひもは枕との間に抵抗がないから，すこぶる快適だ．

21世紀には眼鏡が全部ひも式になると確信を持つようになった．その証拠に，天下の御意見番大久保彦左衛門は，賢明にもひも式「21世紀のメガネ」をかけていた．